

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「東日本大震災避難者親子と犬山の子どもの自然交流」事業

大自然のなかでの憩いや体験活動を通じて 東日本大震災の避難者と交流

愛知県内には福島第一原発事故からの避難者を含め東日本大震災の被災地から1,006名が在住している(復興庁発表、2017年2月13日現在)。その親子を招き、地元の子どもたちと豊かな自然のなかでの活動を通して交流しようという目的のもと、昨年10月22日～23日に「『森と遊ぼう』東北っ子と犬山っ子の自然交流」が犬山市野外活動センターで行われた。



避難者親子と犬山市の子どもたちが交流体験



避難している子どもたちも大自然のなか、思いっきり楽しんだ

自然体験プログラムや熱気球体験などを通じた 東日本大震災避難者と犬山の子どもの交流

自然交流活動に参加したのは、避難者親子14名(親7名、子ども7名)、犬山市の子ども36名とその親5名の計55名。子どもたちは小学2年生から6年生までで、これにボランティアスタッフ30名が加わった。

初日は、①木登り・青竹すいはん(青竹でごはんを炊き、好きな形のおむすびを作る。ロープを使って木登りをする)、②土と遊ぼう(土をこね、器や人形を作る)、③アドベンチャー・スパイダーマンワールド(ロープでネットを作り、そのネットで木に登ってスライダーで滑り降りる)、④頂上決戦ガサガサ王はだれか!?(魚とりをしてポイントを競う。ゲットした魚は食べる)、⑤木の実のパンケーキ屋さん(豆腐や木の実を使ったパンケーキ作り)、⑥ふるさとダイニングと防災カフェ(ふるさと料理や防災食を作って食べる)の6つの選択プログラムが用意され、参加者は思い思いのプログラム

に参加した後、子どもたちが宿泊するテントの設営、キャンプファイヤーを楽しんだ。

2日目は、熱気球に乗って空から犬山市内を眺めた後、防災教室で消火器やトランシーバー体験、防災グッズ作り、交流ゲームなどをして過ごした。

「子どもたちは自然のなかで一緒に遊んでいると、すぐに仲良くなれる。それに加えて、避難している親同士が交流する機会となるのが、この事業の一番の収穫だと考えています。昨年で3回目の実施になりましたが、被災者支援と震災の記憶を風化させないという意味でも、今後も何とか継続していきたいと思います」

この事業を主催する「犬山市民活動支援センターの会」の川島紀之理事長は、そう話す。なお、支援センターの会では、事業実施に当たって関係者10数名による実行委員会を結成し、プログラムの選定などを行った。

自然をフィールドにした集団活動によって 子どもたちにたくましさや優しさを育む

昨年の自然交流事業にはAJOSCの助成が活用されたが、この事業の基盤になっているのは、同団体が犬山市教育委員会からの委託を受けて2004年以来実施している「犬山市子ども大学」である。これは学校が休みとなる土・日曜や夏休みなどに、学校や家庭では得られない様々な体験に挑むという趣旨で行われているもので、昨年度は犬山市の小学生を中心に約450名の子どもたちが参加している。

「子ども大学」の委託事業には学習コース、実験工作コース、技能コース、体験コースといった各コースに3～6プログラムが設けられているが、各プログラムとも概ね年間各10回の活動を行っている。この他にも子ども大学では同団体の自主事業プログラムやAJOSCの助成事業である「生き物探検隊クライマックス」と「冒険教室～上級コース～」がある。なかでも冒険教室は1泊2日が3回あり、そ

れ以外の活動時間も9～16時とほぼ丸一日を使い、山旅、源流探索、段ボールいかだでの川渡り、耐寒キャンプなど、なかなかハードな内容となっている。

「こうした活動を通して、子どもたちがたくましさや自主性、協力して物事を達成することの大切さを身に付けてほしい。そのためにはやはり、自然のなかで集団になって何かを体験することが欠かせないと考えています。今、いじめや引きこもりなど、子どもを取り巻く様々な問題がありますが、集団で自然のなかで遊ぶという体験が少なくなったことが大きな原因の一つだと思います。こうした体験が子どもの心に感受性や優しさといったものを育み、それが大きな財産となっていくと信じています。また、子どもたちの力を信じ、その成長を支えていくことが、大人に課せられた役割であると考えています」川島理事長は、そう話す。

今回交流事業に参加した犬山市の子どもたちのほとんどは、この子ども大学の経験者である。



子どもたちはもちろん親同士も交流が出来た



自然のなかで集団で遊ぶ体験は感受性や協調性を育んだ

助成団体: 特定非営利活動法人 犬山市民活動支援センターの会 <http://www.inuyama-shimintei.com>



活動を通して子どもたちのなかに宝物を詰め込んでいきたい

避難者親子との交流では、親同士が交流の機会を持てたことを喜んでいました。このことが何より嬉しかったですね。今後、新たなプログラムにも取り組みたいと思っています。子ども大学は子どもたちのなかに宝物を詰め込む事業だと思って取り組んでいます。少子化で参加者が漸減していましたが、昨年はおかげさまで参加者が増えました。

NPO法人 犬山市民活動支援センターの会
理事長 川島紀之さん